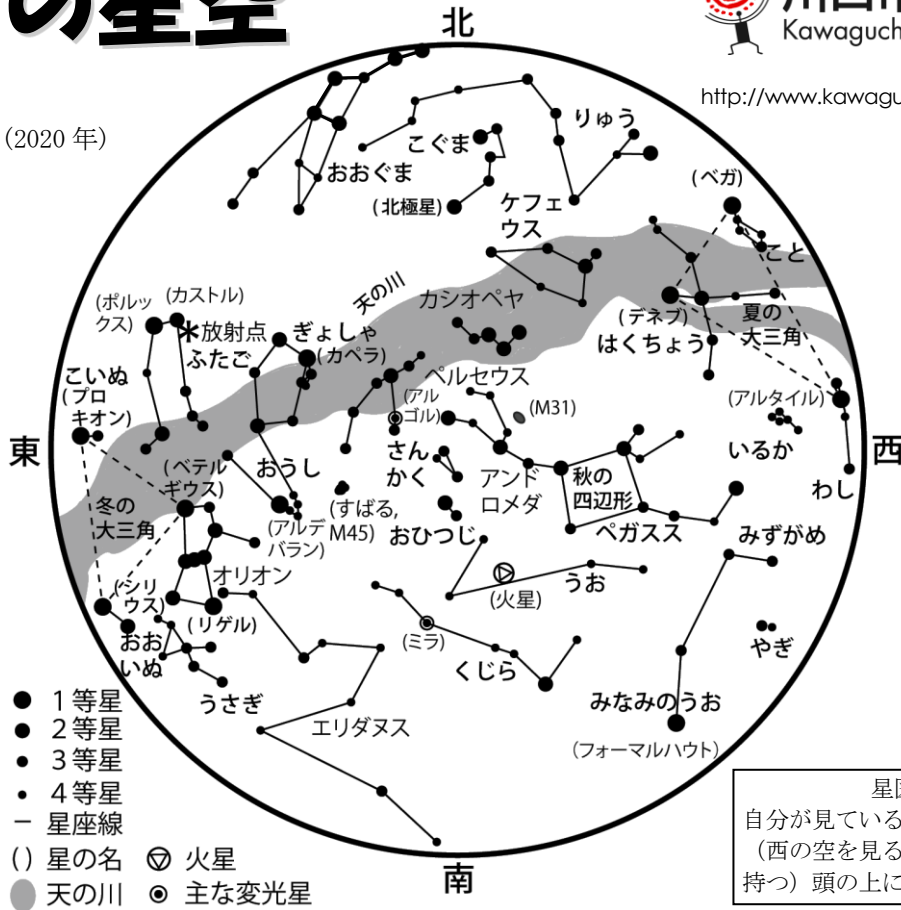


今月の星空

12月 (2020年)

上旬 21 時頃
下旬 20 時頃



星図の見方
自分が見ている方角を下にして、
(西の空を見るときは西を下にして
持つ) 頭の上にかざして見ます。

月 齢 ● 下弦 8 日、● 新月 15 日、● 上弦 22 日、○ 満月 30 日

惑星情報

金星 明け方 南東(てんびん→さそり→へびつかい座 -4等) 火星 夜のはじめ頃 南(うお座 -1→0等)
木星 夜のはじめ頃 南西(いて→やぎ座 -2等) 土星 夜のはじめ頃 南西(いて→やぎ座 1等)

★昇ってきた冬の星座とふたご座流星群(極大14日)

東の空に冬の星座が昇ってきました。オリオン座をはじめ、明るい星が多い冬の星座の中で、先頭を切るのがぎょしゃ座とおうし座です。競うように昇る1等星、ぎょしゃ座のカペラ(黄色、0.1等)とおうし座のアルデバラン(橙色、0.9等)を目印に探してみましょう。

例年12月14日頃に極大を迎えるふたご座流星群。年間1、2を争う流星数を誇る安定した流星群のため、市街地でも数は減りますが流星観察を楽しめるでしょう。観察に適した日は、極大(14日午前10時頃)に近い13日の夜です。20時頃から見え始め、ふたご座(にある放射点)が高く昇る深夜にかけて数が最も多くなる予想です。今年は月明かりがなく(15日が新月)好条件と言えます。特別な道具は必要ありません。空の広い範囲が見渡せる安全な場所で観察しましょう。※観察方法など詳細は、国立天文台のウェブサイト(<https://www.nao.ac.jp/>)等をご覧ください。

★20年に一度の木星と土星の接近

中旬から下旬にかけて、夕方、南西の低い空で木星と土星が距離を縮め、位置が入れ替わる、見かけ上の「接近」が起こります。公転周期12年の木星と30年の土星の動きは火星などの地球に近い惑星に比べて非常に遅く、この2惑星が同じ方向に来ることは20年に一度しかありません。しかも今回は、右図のように、21日頃には月の視直径の約4分の1まで近づく大接近となります。まずは17時半頃、南西の空がひらけた場所で、日々近づいていく様子を肉眼や双眼鏡で観察してみましょう。特に17日は三日月が近くにあります、美しい眺めとなります。

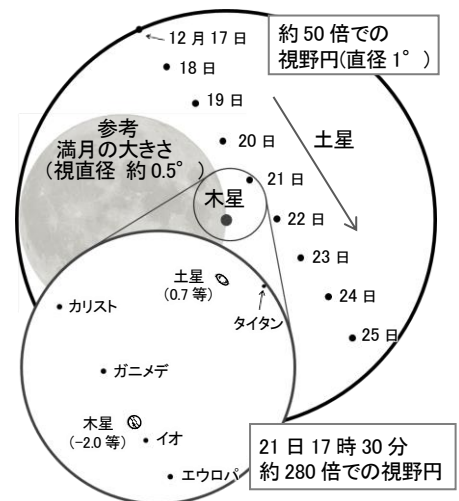


図 望遠鏡で見た木星と土星の接近
※木星を固定し、時刻は各日17時30分。